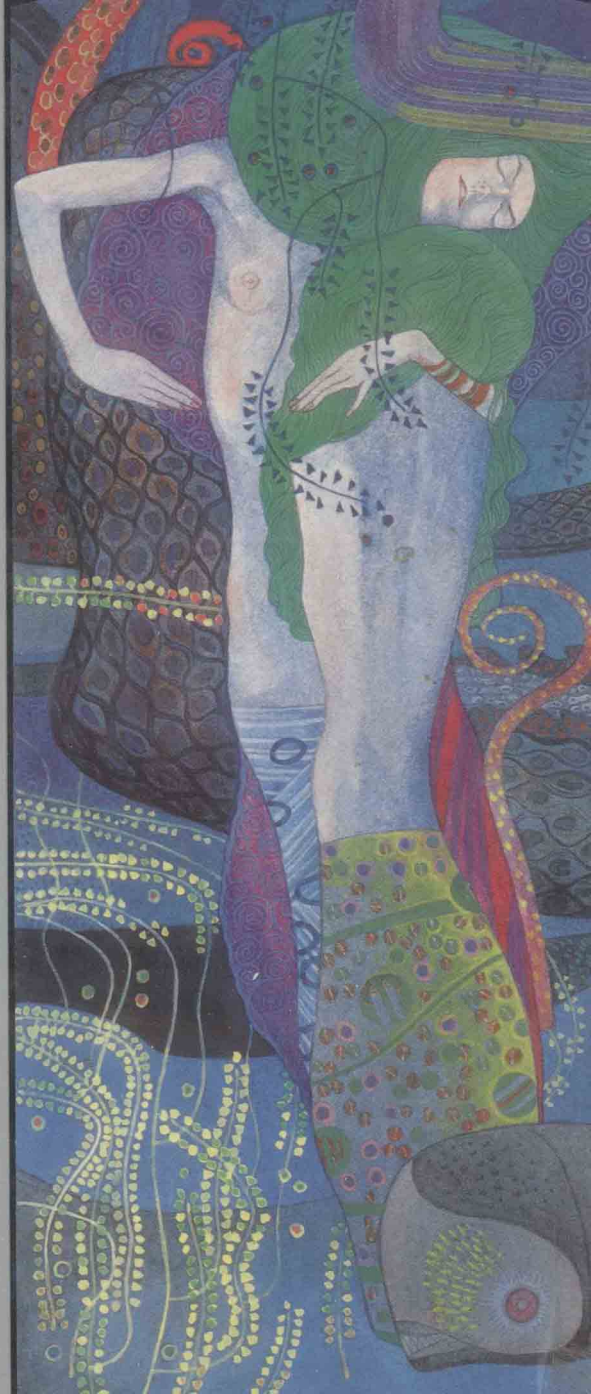
水中花

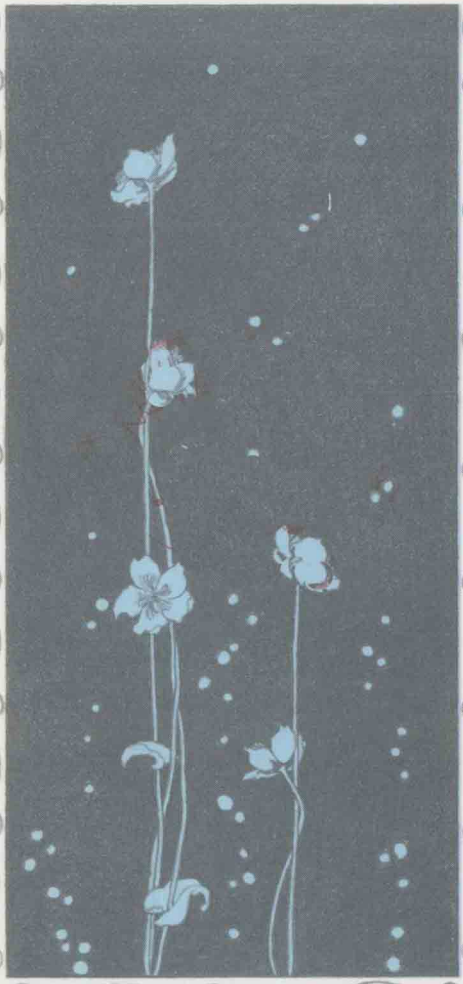
Flōs in Aquā

五木寛之



中花

五木寛之



水中花

すいちゅうか

五木寛之

発行　1979年6月20日
4刷　1979年8月15日
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
〒162／東京都新宿区矢来町71／振替東京4-808
電話 {業務部(03) 266-5111
編集部(03) 266-5411
印刷所　二光印刷株式会社
製本所　新宿加藤製本
定価780円

© *Hiroyuki Itsuki 1979 Printed in Japan*

海中花
SHINCHOSHA

〈日本人が楽しんでする水中花遊び、水を満たした陶器の鉢に、小さい紙切れをちょっとつけると、それまで何かわからなかったその紙切れがたちまち伸び、ふくらみ、色づき、分れ、ちゃんとした、紛れもない花となり家となり人となるあの水中花遊びに見るように――〉

M・プルースト「失われた時を求めて」（井上究一郎訳）より

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

第一章

1

「切られちゃったのよ」

圭子の声は、あきらかに動転していた。受話器を通してきこえてくる彼女の口調が、まるでいつもとちがう。ひどく困惑した気配がその声にはあった。

ふだんは、めったなことで狼狽したりする女ではなかった。良くいえばおっとりタイプ、悪くいえばふてぶてしい性格の持ち主なのだ。

〈一体なにがあったんだろう？〉

西条裕一郎は煙草を消して、受話器を握りなおした。

「切られたって、誰がやられたんだ。おたくがかい？」

「そんなんじゃないわよ。わたしが切られたりするわけがないでしょう、こんな

に真面目にやってるのに」
「じゃあ、どういうことなんだ」
「ほら、例の絵よ。あれが切られたの」
「例の絵って、あの竜崎謙之介の――」
「そう。あなたの紹介で、畑中さんのところから委託でうちの店に置かせていただいてる五百万円の人物画。あれがズタズタに切られちゃった」
最後のほうは涙声になりかけていた。三年前に銀座のクラブ勤めから足を洗って、画廊とコーヒー・ショップを兼ねたような店をはじめた彼女が、こんな声を出すのを、西条はこれまで一度も聞いたことがない。
その絵は、単なる委託商品として商売上の取引きで借りた品物ではないはずだった。そこに畑中の個人的な好意がからんでいるだけに、彼女の取り乱しようも納得がいく。
畑中というのは、銀座で〈ギャラリー・ハタナカ〉という画廊を経営している西条の古い友人である。圭子が四谷の上智大学の近くで自分の店をはじめるからと相談にきた時、西条がたまたま立ち寄った彼を紹介したのだ。画商として一応、

その世界で名の通った畑中は、圭子を一目みて気に入った様子だった。

ただのコーヒー・ショップではなく、アンティークや絵なども置いた店をやりたいという圭子の話を聞くと、畑中は、それはいい、私にもお手伝いさせてください、と、言った。どんなお手伝いをする気かな、と、西条は苦笑したが、そのことに反対する理由はなかった。圭子は西条が見つけて育てた銀座の女たちの、いわばOBの一人にすぎない。困った時の相談にのってやることはあっても、彼女の生き方に指図をするつもりはなかったからである。

西条は、畑中が、自分の好みで集めている竜崎謙之介の作品の一点を、圭子の店に貸してやっていることを知ってはいた。それは十号ほどの母と娘を描いた竜崎の後期の人物画だったはずだ。

竜崎謙之介というのは、戦後の一時期、モダニズム系の作家や詩人たちと〈深夜集団〉というグループを作って活動し、やがて佐江陽造、山中祥三などの人気作家とトリオを組んで精力的な仕事をした物故画家である。

生前はそれほど認められていなかったが、死後、彼について数多くの作家や詩人たちが様々な文章を書き、そのことで特異な人気画家となった。彼が今から十

五年ほど前に、中南米を旅行中、ボリビアの山中で射殺死体となって発見されたことも、当時、大きな話題になったものだった。

反政府ゲリラと間違えられたのだという説もあったし、山賊におそわれたらしいというニュースもあった。だが、いずれにしても彼の死のくわしい事情は判らないままになっている。そしてまた、そのことが彼に一種伝説中の人物のようなイメージをあたえ、最近でもしばしば彼について書かれたり、語られたりする遠因の一つになっていた。

亡くなった時が四十五歳だから、もしいま生きていたら六十歳、円熟した大家の中に数えられていたかもしれない。

ただ竜崎謙之介の作品は、人気がある割りに市場に出回ることが少ないといわれていた。それは彼が生前、画商とほとんどかかわりあわず、独力で創作活動を続けたことと、もう一つ、彼の遺作の大部分を、未亡人が買いもどして竜崎美術館を設立し、そこに所蔵していることが理由であるらしい。

銀座七丁目にあるウエストビルの一階で画廊を経営している畑中は、竜崎謙之介の生前から彼の絵を集めていたという。それらの作品はほとんど市場に流通し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

ておらず、友人の作家や詩人に竜崎自身が贈った作品を強引にゆずってもらったたぐいのものだったらしい。その中の一点を大した資本もかけずにスタートした圭子の店に置かせてやっているということは、畑中の彼女に対する好意が単なる好奇心以上のものであることの証拠だろう。

その大切な絵を切られたというのである。圭子としては、どうしていいか見当もつかずに西条のところへ電話をしてきたにちがいない。

「畑中のところへは知らせたのか」

「ううん、まだなの。だって、どう言えばいいのよ。こっちの立場にもなってみてちょうだい」

「警察へは？」

「それがねえ――」

圭子の声が少し低くなって、

「やった相手が、竜崎謙之介の娘だって言うんだもん」

「ほう」

西条は思わず首をひねった。

「本当かい、その話」
「ね、とにかくすぐ来てちょうだい。お願い。あたしがこんなに本気になって頼んでるんじゃないの。最近あなた、すこし冷たいわよ」
「なに言ってやがる」
西条は苦笑して時計を見た。午後三時を少し過ぎたところだった。自分の車で行っても二十分もあればつくだろう。
「四時にドール・シップの瑛子と会うことになってるんだがね」
「いいわよ、あんなの。どうせ会長のことで愚痴をきかせられる位のものでしょ」
「いや、会長のほうとはうまく行ってるらしいんだが、店の女の子の中でスター格のジュリーって娘が、芸能プロにスカウトされちまったらしいんだ。金も手間もかけて育てて、人気も出てきたところで引っこぬかれたんじゃ、瑛子も頭にくるだろうさ。ちょっと気の毒になってね」
「いいから瑛子ママのことなんかほっといて、すぐに来て。あたしが後で待ち合わせの場所に電話かけて、謝っといてあげるから。とにかく困ってるのよ」

「わかった。すぐに出る。畑中にはまだ内緒だな」
「うん。おねがい。待ってるわ」
「その竜崎家の娘とやらは、まだそこに居るのか」
「いるわよ。警察でも何でも呼べばいいじゃない、なんてふてくされちゃって、可愛くないの。とにかく早くね」
「わかった」
電話は向うから切れた。勝手な女だ、と西条は思ったが、腹は立たなかった。彼の手がけた女たちは、みんなそんなふうだった。だが、それは西条を甘く見て利用しようというのではなく、彼に対する一種の甘えからだろう。すくなくとも彼自身は、そう考えている。そしてそんなふうに事あるごとに頼られることが、西条裕一郎という男にとっては、決して不快ではない。いや、むしろ、そういう日常の中で生きていることが、彼にとっては楽しみであるのかもしれなかった。
西条裕一郎は四十代の後半にさしかかっていながら、いまだに家庭を持たない男である。兄弟もいず、父親もいなかった。父親に当る人物は、名古屋の有名な建築会社の経営者だったという。彼はその実業家が東京出張の際の愛人役をつと

める小料理屋の女主人の一人息子として育った。
運動が得意で、しかも成績のほうも格別な努力もせずにトップグループにいたから、私生児という劣等感もそれほど彼を苦しませはしなかった。
ただ、幼い頃から、彼は得体のしれない脱力感のようなものを自分の中に自覚していたようだ。それはどうにも他人に説明しようのないあやふやな感覚だった。
〈まあ、どうでもいいけどさ〉
と、いうのが彼の子供の頃からの口ぐせである。彼はその構内のたたずまいが気に入っているというだけの理由で、さして有名でもない私立大学にはいり、ひと通りいろんな学生生活を体験した。彼の高校の成績からすれば、どんな一流校でも合格できただろう。だが、彼は気楽に、波間にただよう海月(くらげ)のような生き方がしたかっただけだった。
大学を卒業して、四、五年間、ヨーロッパに出かけて、遊び半分の生活を送った。ブリュッセルでチョコレート作りの職人の見習いになったり、リヨンでレストランのコックの勉強をしたり、ミラノで皮製品のデザイン工房に籍をおいたり、ル・マンの耐久レースに出るスポーツカー・チームのメカニックの手伝いなども

やった。そして結局、どの仕事にもあきて、東京へもどってきた。

その後、父親に当る名古屋の実業家が亡くなり、しばらくたって銀座の七丁目にある小さなビルが一つ、彼の母親の名義になっていることが知らされた。そのビルが今のウエストビルである。七十歳を過ぎた母親はまったく健在で、自分の店の指揮をとって働いている。彼は父親から残されたビルの三階に住み、他の階を貸して、貸しビル経営者という肩書きがついた。一階には、学生時代の友人の畑中が入居して画廊をやっている。二階には小さな酒場と、喫茶店がはいっていた。

二年ほど前に、畑中の提案で、建物の内外を改装し、見た目にはかなり小綺麗(こぎれい)なビルになったものの、西条自身の生活は一向に変る気配がない。

彼は二階に入居している酒場や喫茶店の経営者と親しくしているうちに、なぜか入居者たちから妙に信用されて、女の子の相談や、店の経営について頼まれることがしばしばあった。

時間があって、仕事らしい仕事がなく、金銭的にも性的にも淡泊な彼が、生き馬の目を抜く夜の世界の住人たちには、めずらしい人物のようにうつったのだろ

う。

やがて、何年かたつ内に、彼は酒場や、クラブや、喫茶店などの業界で、次第に大切に扱われる存在になっている自分を発見した。

ホステスや、酒場のママたちが、なにかと相談を持ちかけてくるようになってきたのである。友人の紹介だといって、アルバイトをしたいという女子大生が電話をかけてくることもあったし、店をかわりたいという話を持って訪ねてくる女たちもいた。中には新しく小さな店を持つためのアドバイスを求めてくる女たちもいる。暴力団にからんだ男に追われて逃げ込んできた少女もいた。良心的な整形美容の医師を紹介してほしい、という頼みも何度かあった。

そんな相手に、西条裕一郎はひとつひとつ真面目に相談にのってやった。それが彼には少しも苦痛ではなかったし、その事で報酬を期待する気もなかった。彼はただそんなふうに銀座の夜の世界で生きている女たちと、親しい間柄になることが、本心から楽しかっただけである。家族や兄弟の味を知らない彼にとって、それは新しい家族のようなものだった。

女たちは変ってゆく。西条の助力を受けて一人立ちした女たちの中には、何年

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo